

# エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529) について

木ノ脇 悦 郎

宗教改革運動がヨーロッパ全土に燎原の火の如く広がり始めると、各地のローマ・カトリック教会の指導者達はその動向に対して非常に神経質になり、様々な対応を迫られるようになった。無論、中には極めて保守的で、自らの立場には（信仰的にも、学問的にも）分析のメスを入れず、ただ新しく起こってきた運動や思想が悪の根源であるとして、それ等に対し厳しい検閲と批判のみを加える者もあったのである。

エラスムスは改革派に属する者ではなかったが、さりとして教会や社会の改革に関して無関心であったわけではない。むしろ熱心に改革を願っていたが故に、1520年代に各地に生じてきた不毛な争いや、ためにするための非難、攻撃や無定見な自己主張に対しては非常な心痛を抱いていたし、各陣営に注意をうながしてもいたのである。中でも、彼が最も嫌い、批判して止まなかったのはある種のカトリック陣営の保守主義者達、特に混乱の原因を学問 *bona litera* に帰することで解決の糸口にしようとするような「野蛮で無知」な者に対してであった。

フランスでは、いわゆる改革運動ではないが、ルフェーブル・デタープル等の人文学者の影響下で *évangélisme* の傾向を持つ者が出始め、ベルカンのように改革を志す者が現れるのである。警戒心を持ったパリ大学神学部は、1523年に、彼の自宅捜査を行い、押収図書を検閲を開始する。そしてまずウルガータ以外の聖書の翻訳出版を禁止している。勿論、エラスムスの『校訂版新約聖書』もその対象となり、『新約聖書パラフレーズ』についても疑問の目が投げられるに至るのである。その時に、势力的に、強引に改革者、人文学者を追求、

エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529)について

起訴し、非難、譴責していった代表的人物は、ソルボンヌで「猪」*bête noire* と呼ばれていたベータ<sup>(1)</sup>であり、そのよき協力者であったクチュリール<sup>(2)</sup>（スートール）であった。

エラスムスは、『対話の有用性について』の中で「『文法学者の会議』という作品の中で、私は自分が最も博学であると自認しているカルトウジオ会士のある研究を嘲笑しております。彼はギリシャ文字に対しては実に愚かにも吠えたてるくせがあるのに、今自分の書物にギリシャ語の表題を採用し、しかもこっけいなことに、本来 *antimarionos* あるいは、*antidicomariones* と呼ぶべきものを *anticomaritas* と言っているのです」<sup>(3)</sup>と書いている。

今回、ここに翻訳、解説を試みたエラスムスの「文法学者の会議」は、1529年版の『対話集』に新たに加えられた作品である。そして、それは上の引用からも明らかのように「最も博学であると自認しているカルトウジオ会士」即ちクチュリールへの皮肉な嘲笑のための作品である。当然、その嘲笑はひとりクチュリールのみに向けられているのではなく、彼と同類であるとエラスムスが断じたベータや彼等の属しているソルボンヌの神学に向けられたものであるといえよう。

この対話を理解するために、1529年に至るまでの彼等の関係を追跡しておくことにしよう。1523年にウルガータ以外の聖書翻訳出版を禁止したことは既に述べた。その後、エラスムスの『新約聖書校訂版』や、特にその「注解」への批判がソルボンヌからなされている。エラスムスはそのことに関して1525年4月28日にベータ宛て書簡を送っている。少し長くなるがその要旨を記すと次のようである。<sup>(4)</sup>

私のルカ福音書パラフレーズに関してなして下さった注意に感謝申し上げます。私は誤ちを除きたいと願っておりますので、他のパラフレーズや注解についても御注意を下されば幸いです。私は、学問的にきちんとした批判であって、単に敵対心からなされたものでないのならば受け入れる準備が出来ております。ところが、ソルボンヌのカルトジオ会士、ペトルス・スートールは悪口と傲慢にみちた事を語り、その内容は愚鈍と無知によるものにすぎません。その作品

エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529)について

には「エセ神学者、変節漢、狂気、躓き、異端、冒瀆」等の悪口のみが満ちており、内容は要するに聖書の新しい翻訳が異端的であり冒瀆的だということなのです。それならばトマスやベダやリールのニコラスも同罪ということになるのではないのでしょうか。それに冒瀆的というのは教皇が公文書で証明した場合にあてはまるのですが、私はハドリアヌス六世から新約聖書だけでなく旧約聖書の翻訳もするように励ましを受けているのです。思慮ある判断を下す方々が多く存在するはずのソルボンヌがどうしてかような判断を下されるのでしょうか。勿論私はあなた方に喜ばれてはいないことを承知しておりますが、保守的神学者達が軽蔑や憎しみにとりつかれるあまり御自分の無教養や恥知らずを公表されないようにと願っております。道化師もそれほど恥知らずではありませんし、豚でさえもそれほど無教養ではないのですから。

これはエラスムスがベダに送った最初の書簡である。しかしたいへんな書簡といわねばならない。ソルボンヌを無教養呼ばわりしているのである。<sup>(5)</sup> エラスムスがこの書簡を書く直接のきっかけになったのは、この年に公けにされたクチュリールの文書『聖書の翻訳について』*De translatione Bibliae* である。その文書において、ウルガータ訳以外の聖書翻訳の不当性が述べられると同時に、エラスムスは「とるに足りない弁舌の徒」としてこきおろされた上、その役割としてふさわしくない神学的問題をいじくりまわさないようにと警告されているのである。

それに対してエラスムスは同年8月にクチュリールに対して反論を書いている。『ペトルス・スートールの錯乱に対する返書』*Apologia adversus debacationes Petri Sutoris* 及び追加としての *Appendix respondens ad quandam antapologiam Petri Sutoris* である。1525年から26年にかけてエラスムスとベダの間には多数の書簡のやりとりが行われている。その一つ一つについて詳論することは省略せざるを得ないが、それは論争というよりも、悪口の応酬であるとの印象を深められる。そのような応酬の中でベダはエラスムスに対し繰り返しその異端性を強調して脅迫的ですからある。事実、1526年5月にはエラスムスの『対話集』を異端の書として禁書にしているし、その直後に

エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529)について

ルフェーブル・デタープルと同じ誤まちを犯しているとして、ルター派の役に立っているという理由をあげ論駁書 *Annotationes Natalis Bedae in Jacobum Fabrum Stapulensem et Desiderium Erasmus Roterodamum* を書いている。エラスムスも8月に『ベダの計算された讒言に対する序言』*Prologus in Supputationem calumniarum Natatis Bedae* を書き反論をくりかえしている。

1527年11月16日にエラスムスはベダに対して最後の手紙を書いて、その策動や悪意にみちた曲解を非難し、教会の擁護者を自認している当のあなたが極悪な助言者達に耳を借して不和の種をまきちらし、教会を争いにまきこんでいると指摘する。<sup>(6)</sup> ところが、ソルボンヌはエラスムスの著作に異端説を発見し、彼をルターやウィクリフの徒であると断じたのである。1528年6月には、ベダが先のエラスムス異端説の決裁をパリ大学に追認させ次の年『かくれルター派に対する弁証』*Apologia adversus clandestinos Lutheranos* を公けにする。それに対しては『ベダの貼ったレッテルに対する反論』*Responsio ad notulas Beddaicas* でもって応えている。このように1529年に至るまでに、宗教改革運動の進展とも関係しながら、パリ大学とエラスムスの関係は修復不可能なほどに悪化していったのである。このような状況の中でエラスムスは『対話集』の新版を出版し、その新作中に「文法学者の会議」を入れたわけである。

このように人文学者としてのエラスムスを徹底的に追求していたクチュリールが、言葉の誤ちを犯す事件が発生する。それは、4世紀以来公認されてきたマリアの永久処女性について再燃してきた論争に対するクチュリールの批判文書である。彼は、四世紀にエピファニオスが公認のマリア論に反する異端として退けた *Antidicomarianites* を *anticomaritas* と表記して *Apologeticum in novos anticomaritas* という文書を公けにしたのである。<sup>(7)</sup> この誤ちがクチュリールの全くの無知からくるものであるとしたエラスムスは、それを材料にしてソルボンヌを嘲笑の対象とする作品を書くのである。つまり、誰も知らない *anticomaritas* という語をめぐって「文法学者」（彼等がエラスムスをそう呼び、その範囲にとどまっているように警告した）が様々なこじつけた

エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529)について

理論をふりまわすという展開である。しかもその論理展開の中で特に三人をターゲットとして彼特有の地口まわしで皮肉っているのである。即ち、Nöel Bèda (Natalis Beda) は Natatilem Betam(泳ぐ甜菜) あるいは cacatilem bestiam(汚らわしい獣) であり、クチュリール(Petrus Sutor)は Sutorium (靴直し)そしてデュシェーヌ Guillaume Du Chesne (Quercus)<sup>(8)</sup> は gal- lam e quercu (柏の木のコブ) という具合である。

話者として登場する七人の名前は、実在の人物 Bertulphus<sup>(9)</sup>を除いて架空のものであるが、これもソルボンヌの神学者達への皮肉ととれよう。Albinus は albus から「死人のように白い取り澄まし屋」、Canthelus は cantherius から「駄馬」あるいは「去勢された馬」、Diphylus は「雑犬」<sup>(10)</sup> Eumenius は Eumenides 即ち「親切な者であろうが実は悪鬼の婉曲的呼称」、Fabullus は fabula から「おしゃべり屋」「うわさ好き」、Gaditanus はそのまま「ガデスの住民」即ちスペイン人(スペイン人の修道士、神学者にエラスムス批判者が多かったことを指す)を示すものと考えられよう。

翻訳のための底本として用いたのはA S D版全集、Erasmi Opera Omnia I - III、L B版全集 Desiderii Erasmi Opera, Tom I, であり、参考のために1679年アルステルダムで発行された Familiaria Colloquia を参照した。

アルビヌス (A)、 ベルトゥルフス (B)  
 カンテルス (C)、 ディフィルス (D)  
 エウメニウス (E)、 ファブルス (F)  
 ガディタヌス (G)

以下A～Gの記号で表記する。

- A. この中に数学のよくお出来になる方がどなたかおられますか。  
 B. 何のためですか。  
 A. 私達文法学者が何人位集まるか、確かなことをそのお方が教えてくれるは

エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529)について

ずです。

- B. そんなことでしたら、何も算術の先生がいらっしゃらなくとも自分の指で数えることが出来ましょうよ。まずあなたを親指に、私を人指し指に、カンテルスを中指に、ディフィルスを薬指に、エウメニウスを小指に、そして左手に移って親指にファブルスと人指し指にガディタヌスをおきます。まちがっていなければ、7人になりますね。でも、そんなことを知ってどうなるというのでしょうか。
- A. 7という数字でその集まりが合法的なものになると聞いているのです。
- B. どんな集まりのことをおっしゃっているのですか。
- A. 長い間、しばしば私を悩ましてきた深刻な問題を解くための会議なのです。そうなのです、私だけでなく教養ある多くの人々にとって深刻な問題なのです。この公会議の権威によって問題が解決されるように、それを公けに提示してみようと思っているのです。
- C. アルビヌスさん、あなたが理解もせずその最も鋭い心をさえもそんなに長いこと悩まし続けるというのではそれは何かきつと大変なことであるにちがいありません。それならば、それがどんなものか私達も知りたいものです。そうしたら皆さんにかわって私がお答えすることにいたしましょう。
- A. それでは、この際ですからしっかり耳を傾けて下さい。それによく注意して下さい。一つの目で見るとも複数の目で見るとも確かですから。<sup>(11)</sup> では、皆さんの中に *anticomarita* という言葉がどんな意味なのか解決して下さい方がどなたかおいででしょうか。
- B. 容易なことではありませんね。それは、例えば一種の甜菜のようなものではないでしょうか。昔の人がねじ曲がってもつれた茎、異常に愚直な姿、ふれてみればぞっとするような臭いから「泳ぐ甜菜」と名づけたようないやな臭いのする三葉だと思っております。<sup>(12)</sup>
- C. 「泳ぐ甜菜」ですか。むしろ「汚らわしい獣」といったほうがよくありませんか。<sup>(13)</sup> これまでに「泳ぐ甜菜」なんていう名前は聞いた人も読んだ人もいないでしょうから。

エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529)について

- B. いいえ、例えば一般に誤ってそう呼ばれている Mammetrectus が同じようなことを示していると思うのですよ。つまり本当は Mammothreptos という名前で、あなたはそれを「おばあさんの可愛い子」と訳すかもしれません。<sup>(14)</sup>
- A. いったいどういう意味の名称なのですか。
- B. あなたは、書物の中に純粋な喜び以外どんなものも見出したりはしないということを当然理解していますよね。それと同様に、母親がその子に対する以上におばあちゃんはその孫娘に対してはそれ以上の愛情を持つのが常だということなのですよ。
- A. ずいぶんと楽しいお話をあなたはなさるといわけですね。ところで、私が最近くだんの写本に出会った時、実に笑い死にしそうになったのですよ。
- C. あなたが実にまれに遭遇したというその写本をどこで見つけ出されたのですか。
- B. 聖バボンの修道院です。リビヌスという名の人<sup>(15)</sup>が昼食の後で、ブルージュにある彼の個人図書館に連れて行ってくれたのです。その老人は、何か自分の記念を子孫のために残したいと願って、費用には糸目をつけずに買い集めたのです。書物は、すべて手書きで羊皮紙のものでしたし、様々な絵はめずらしい上布や金でおおわれていて飾られていないようなものは何もありませんでした。そればかりか、膨大な量の写本がその威厳を誇示していることもわかりました。
- A. いったいどんなものがあったのですか。
- B. 有名なものはみんなありました。Catholicon<sup>(16)</sup>、Brachylogus<sup>(17)</sup> それに比喩で説明されたオヴィディウス、その他無数です。その中で最も優美な Mammethreptum を発見したのです。その喜びの中で、私は「泳ぐ甜菜」というのを見つけたのです。
- A. どうして「泳ぐ」などといわれているのでしょうか。
- B. 私の読んだことを再現してみましょう。著者の意に沿って証言しなければいけませんね。彼はこう言っています。「それは湿った臭い場所に生ずる

エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529)について

ものであって、汚物、肥よりも快適な場所には決して生じはしない。嘗は耳にこそあれ」と。

- A. 実際にひどくにおうのでしょうか。
- B. ある種の排泄物でさえもそんなにひどく臭うことはありませんよ。
- A. それは野菜のために何か役に立つのでしょうか。
- B. 無論、それは喜ばれるのですよ。
- C. 恐らく豚とかロバとかキプロスの牛<sup>(18)</sup>にでしよう。
- B. いえいえ、人間にです。それもいわば魅力ある人々に喜ばれるのです。パエリクィの一族で<sup>(19)</sup>、彼等は長い間、くりかえして饗宴を持ち、共に飲む最後のものは彼等の言葉で「取っておき」*resumptum* とでも呼ぶのでしょうか。私達にとってはデザート<sup>(20)</sup>、あるいはお菓みに類するものですね。
- A. 何て素晴らしいデザートなのでしょう。
- B. ところで、この饗宴には一つの法則があるのです。そこで提供したいと思うものは何であれ主人の自由に出来るということと、客は何かを拒むとか、逆に何でもかんでも是認するというようなことはしてはいけないことになっているのです。
- A. では、毒人参を出すとか、料理し直したキャベツが出てきたらどうするのですか。
- B. 出されたものが何であれ、その場で黙って食べなければならないのです。食べてしまったものを家に帰って吐き出すのは自由です。そのために彼等は通常は「泳ぐ甜菜」あるいは *anticomarita* を出すのです。それは、どっちの名前で呼んだって同じことで、別にたいしたことではありません。それよりも、彼等は柏のコブ<sup>(21)</sup>だとか多くのニンニクも混ぜ込んで、すり鉢料理を完成します。
- A. いったい誰がそんな野蛮な規則を説いたのでしょうか。
- B. どんな独裁者よりももっと力のある者のやりかたですよ。
- A. あなたのおっしゃることは、あまりうれしくない結末ですね。



エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529)について

- B. 私の番は終わりました。でも、どなたかもっと正しい答えをお持ちでしたら別にこだわりはいたしません。
- C. 私は、昔の人達が anticomarita と呼んだのは魚だというようなことを読んだことがあるのですが。
- B. 著者は誰ですか。
- C. 著者の名前はよくわかりませんが、その写本をお見せすることは出来ます。それはヘブル文字を使って、フランス語で書かれているものです。
- B. anticomarita という魚はいったいどんな形をしているのでしょうか。
- C. 黒いうろこでおおわれていて、ただお腹だけが白い色をしているのです。
- B. 私の考えでは、その魚というのはいわばキュニコス派の外套のようなものではないでしょうか。ところで、味はいかがなものではないでしょうか。
- C. そんなに悪くはありません。ですが、有害なのです。それは臭い穴の中で、時には下水道で生まれて、なまくらで、泥にまみれています。又その味わいによってひどい痰を生じることもあります。あなたが必ず吐き気を催すような味です。彼等が Celtithracem と呼んでいる国ではよくあることなのです。というのは、そこでは殺人よりも肉を味わうことのほうがいとうべきことだなどということが賞賛に値いすることなのですから。
- A. anticomarita と同様に、全く不幸な国ですね。
- C. <sup>(22)</sup> 私は手の内にあるものをお見せしただけでして、自分の意見で誰に対しても偏見を持ちたくはないのです。
- D. 私は言葉の語源自体から anticomarita を考えたいですね。それは不幸にも老いかかった夫に結びつけられた少女を意味することが明らかだと思うのです。Mammothreptus やヘブライ語の断片からこの言葉の解説を求めることが必要ではないでしょうか。なぜならば、c. q. k は同族の文字に属するのですから、quo と書くところを co と変えるのはあり得ないことではありませんよ。
- E. もしディフィルス氏のおっしゃることがラテン語の表現だとすれば、何かがあることになるのかもしれませんが、私には三つの部分がギリシャ語か

エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529)について

ら成っているように思えるのです。即ち「反対」を意味する *anti*、「地方」を意味する *come*<sup>(23)</sup>、そして「女らしくしゃべる」という意味を持つ *όαριζειν* ですが、ここで二音節が一つに縮まって *o* になり、*anticomarita* ということになります。従って「田舎のおしゃべりでみんなの邪魔をする者」という意味になるのです。

- F. なるほど、エウメニウスさんのおっしゃることもごもっともですが、私にはそれぞれの音節を持っている音がまとめられて一つの言葉をなしているように思えるのですが。つまり *άν* は *άνους* から、*τι* は *τίλλων* から *κω* は *κώδια* から、*μα* は *μάλα* から、*ρι* は本来 *ρυ* であったのを書きまちがったので *ρύταρά* から、*τα* は *ταλας* からそれぞれとられているのです。ですから、そこから次のような意味が出てくるのではないのでしょうか。「腐った獣皮から毛をむしとる狂ったあわれな者」というわけです。
- A. さっきベルトゥルスさんの言われた「泳ぐ甜菜」はそういう仕事にはうってつけの食物ということですね。
- B. たしかに *anticomarita* が *anticomarita* の食糧というわけですね。
- G. 皆さんがよくお考えの上おっしゃったことは、それぞれ確かなようですが、私には「夫に忠実でない妻」を意味する言葉に思えるのです。というのは、*anticomarita* は *antidicomarita* の短縮形なのです。そしてその意味するところは、いつも夫に反抗しているということなのです。
- A. しかし、もし私達がそんな言葉の綾を受け入れるとすると、「下痢」*foria* からは「広場」*fora* が簡単に出てくることになり、*cuniculus* が「ほととぎす」*cuculus* を生むことになってしまいますよ。
- B. ところで、この元老院会議で執政官たるアルビヌス君は、御自身の考量なされた御高説をまだ説いてはおりませんな。
- A. 私は語るべきことなど全く持ちあわせてはおりませんのでね。でも、最近私が最も雄弁なお客様から学んだことなど提示させていただきませんか。この御仁は鶯がしばしば歌声を変えるのにもまして、頻繁に語っているこ

エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529)について

とを多彩に変える方です。彼の言うことによれば、この言葉はカルデアのもので、三つの部分から成り立っているというのです。彼の証言によりますと、anti は「邪悪な」とか「狂乱の」というような意味を持ちますし、comar が「岩」を、そして ita は「靴なおし」<sup>(24)</sup> を意味する言葉だということです。

- B. いったい誰が岩に脳味噌など与えたのですかな。
- A. 人種が変われば、別に不思議というわけでもないでしょう。
- G. 「人の数だけ多くの見解がある」<sup>(25)</sup> とはよく言ったもので、この会合でもあてはまりますね。それではどうなりますかね。評決を数えあげることには出来ますが、大は小を超えることになりまから見分けることは出来ませんね。
- A. ですから、よりよいものは劣ったものに勝るのですよ。
- G. そのためには又、他の会合が必要となるのでしょうか。というのは、どんな花嫁でもその人にとっては最高に美しいものに見えるわけですから。<sup>(26)</sup>
- A. それが本当なら姦通をする者などいなくなることでしょうよ。それはともかく、簡単に解決する方法がありますよ。多くの意見の中からどれに決するか籤を引きましょう。あつた人の望むものが全ての意見の中で妥当だということにするのです。
- C. あたり籤はあなたでしょう。ちがいますか。
- A. 私は最初の意見がよろしいかと考えますが、最後のものもいいですね。
- C. あなたがみんなのためにこれがふさわしいと言え、私達は皆賛成しますよ。
- A. さて、それではこの件に関して疑われるべきでない統一見解はこれだということにしましょう。
- C. 結構です。
- A. 誰か反対する者があつた場合、何か罰せられるようなことがありますか。
- C. その人は「文法学者中の異端者」と大きく刻印されることになります。
- A. それでは、私には決してないがしろにすべきではないように思える吉兆<sup>(27)</sup>

エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529)について

を加えておきましょう。ある医者シルスさんから受けたことをこの友人達と共有しようと思うのです。

- B. いったい何でしょうか。
- A. 「泳ぐ甜菜」や「柏の木のコブ」や「黒い靴なおし」を石臼の中で砕き、更に六オンスの糞を混ぜ込んで湿布薬を作るのです。それが犬の疥癬や豚の好色によく効く即効薬になるということです。
- B. ああ、アルビヌス君、*anticomarita* に関するやっかいな問題をみんなの所に持ちこんできたのはあなたなのですよ。いったいどんな作家の中からそんな言葉を選び出してきたのです。
- A. 私が言っていることです。それもあなたの耳にだけです。
- B. 私は聞きました。でも、そのようにして私がもう一人の人の耳にささやくことになるのですよ。
- A. そして、それがくりかえされて、結果的に多勢の人が知るようになるのでしょうね。
- B. まず一人の人から二人が知るようになった時は、たしかにあなたがおっしゃったということになるのですが、複数の人から川のように流れ出した時にはもうあなたはどうしようもないというわけですね。<sup>(28)</sup>
- A. 少数の人しか知らないことなら秘密にしておくことも出来ますが、多くの人に知られるとそういうわけにはまいりません。ですから、三人になれば、もうそれは多勢の人に広がったも同じことなのです。
- B. 全くです。ですからそれと同じで、三人の妻を持つ人は、多勢妻がいるといわれるわけですね。ところで、頭に三本しか毛がなかったり、口の中に三本しか歯のない人もたくさんあると言われるべきなのではないでしょうか。それとも少ないと。
- A. 詭弁家ですねえ。耳をかして下さい。
- B. 私は何を聞いているのでしょうか。それは全艦隊をひきいて征め落したギリシャ人の都市を何と呼んだらいいかわからないで、トロイアのかわりにストゥリウム<sup>(29)</sup>と呼んだことよりも変なことですね。

エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529) について

- A. そして、このラビヌス氏<sup>(30)</sup>は天から下ってきて神の意志も存在しないのに人間的な事柄を引き受けてしまったのです。私達は長い間、いったい人間はどこにいるのか、信仰はどこにあるのか、哲学はどこにあるのか、学問はどこにあるのかを問い続けてきたのです。
- B. この御仁こそ愚神の首たちの中でも第一のものに値しますね。これからは、*anticomarita* と共に *archimorita* (最大の阿呆)<sup>(31)</sup> と呼ばれることこそ彼にふさわしいようです。

エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529)について

**【注】**

(1) Noël Bédá (1470–1537)

ラテン名は Natalis Beda。1520年から36年までパリ大学神学部の中で改革者や人文学者攻撃の代表的人物として活躍した人物。特にエラスムス攻撃では先頭に立って、その聖書翻訳と注解についてこれを異端的文書として告発を続けた。ベダとエラスムスの関係については次の拙論参照の事。

「宗教改革におけるエラスムスと同時代人達」『キリスト教史学』第47集、キリスト教史学会、1993年7月、P.88–96。

又、その攻撃のあまりの激しさに、パリ大学の同僚達からも「猪」*bête noire* とあだ名されていたという。James K. Farge, *Biographical Register of Paris Doctors of Theology 1500–1536*, Toronto, 1980, P.31–32.

(2) Pierr Cousturier (又は Sutor) (1475–1537)

1511年にカルトゥジオ会に入り、パリ大学のベダに協力して改革的見解に対抗した。特に、人文学者達を改革思想の原因であるとして敵視し、エラスムスに対して激しく攻撃をした。その攻撃は、常軌を逸するほどの悪口雑言にみちているため、エラスムスは様々な文書でこれを冷笑的に反論している。ここに訳した「文法学者の会議」はその代表的なものといえる。James K. Farge, *ibid.* P.119–121 及び、同著者 *Orthodoxy and Reform in Early Reformation France, The Faculty of Theology of Paris. 1500–1543*, Leiden, E.J. Brill, 1985, P.186–189. 参照。

(3) *De utilitate Colloquiorum*, LB., Tom, I, P.906, ASD., I–III, P.748

この *De utilitate* は1526年に書き始められるが、それ以後新しい対話が創作され、批判を受けるに伴って書き加えられたものである。従って、この部分は1529年以後のものということになる。

(4) Ep. 1571, P.S. Allen, E.E. Tom.VI., Oxford, 1926 P.65-69. この書簡

に対して、ベダは同年5月21日に反論を書き、エラスムスの主張がキリスト者のつまづきになっているとして、人に災いをもたらすことを書くべ

エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529)について

きではないこと、及びその作品の多くが異端的であると警告している。

Ep.1579, *ibid.* P.81-86..

- (5) ソルボンヌの保守的神学者への批判として「無教養」という場合。主として彼等の学問的姿勢の問題、特に人文学 *bona litera* やそれに裏付けられた聖書研究への頑なな拒否的態度を指している。このことについてはエラスムスの他の著作、例えば『痴愚神礼讃』、『校訂版新約聖書』への序文のうち「アポロギア」『真神学方法論』等においてくりかえし論じられるし、他の人文学者、特にメランヒトンとの書簡のやりとりの中にもくりかえし見られるものである。
- (6) Ep.1906., P.S. Allen, E.E. Tom. VII., P.248-250, *Iactas te propugnatorem Ecclesiae, At quibus tandem modis possis vehementius Ecclesiam oppugnare, quam eum calumniis opprimendo quem adversariae factiones ducunt pro hoste capitali, et nova dissidea in orbe suscitando?* P.250
- (7) エピファニオスの信経のなかで、キリスト誕生について「すなわち聖霊によって、終生処女聖マリアより完全な人間として」受肉されたとあり、マリアの永久処女性を固定化した。参、A. ジンマーマン(浜寛五郎訳)『カトリック教会文書資料集』、エンデルレ書店、1974 P.12.
- ところが、16世紀に新たな異説を唱える者が出てきたので、クチュリールは *Apologeticum in novos anticomaritas* を書いてマリア論の擁護にのりだしたのである。ところが、熱心さのあまりマリアを *redemptris et salvatrix humani generis* (人類の贖い主にして救い主)と呼んでしまった。キリストと同等の位置を示す名称は不尊であるとして、彼はパリ大学神学部からその部分の取り消しも要求されたという。このことからクチュリールの熱心さと不用意さをうかがい知ることが出来よう。
- 参、James K. Farge, 注(1)の文書 P.120。更に Erika Rummel, *Erasmus and His Catholic Critics, II*, 1523-1536, Nieuwkoop, 1989, P.71-72をも参照の事。

エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529)について

(8) Guillaume DuChesne (又は de Quercu ? - 1525)

彼は1493年にソルボンヌのメンバーとなり、1511-12年の反教皇的教会会議（ピサ、ミラノ）では公会議派の代表としてその正当性を主張する等、積極的なパリ大学のメンバーであった。又宗教改革に関してはベータの主な協力者としてルターやエラスムスへの攻撃に力をつくした人物である。

(9) Hilarius Bertholf (Berthulphus, ? - 1533) は、スペインの人文学者、教育思想家ビベスと共にパリで学び、彼によってエラスムスに紹介された。エラスムスのために宗教改革者やフランソア一世のような王侯との連絡の役目を努め、エラスムスとの関係は終生良好であった。その人柄からエラスムスは彼の人格を好んで対話の中でとりあげている。例えば1523年の「宿屋」*Diversoria* や同年の「詩的な饗宴」*Convivium poeticum* に見られ、この対話では、話者の一人として彼の名前を使用したものである。

(10) 語源は明らかではないが、P. Smithの解説での訳 *mongrel* という英語をそのまま用いた。P. Smith, *A Key to the Clloquies of Erasmus*, Harvard Univ. Press, 1927, P.46

(11) *Plus vident oculi quam oculus*. 「一つの目より多くの目の方がよく見る」という諺。

(12) この植物については『格言集』*Adagiorum* の中でとりあげている。*Anagyrim commoves*. 薬用にもなる植物で手の上でこすると吐き気を催すような匂いのする灌木であるといい、これについてはプリニウスの『博物誌』第27巻、第四章にあると説明する。又、地名 *Anagyris* からきているとしてアリストファネス『女の平和』の引用をしている。邦訳では『ギリシャ喜劇全集』(高津春繁訳) 第二巻、人文書院 1961, 24頁にアナギエールスの地名が出てくる。ASD. Tom. II, P.52. C.W.E. vol.31, P.65-66

(13) *Natatilem narras betam, imo cacatilem bestiam*, と表記される。どちらも *Natalis Beda* を指して皮肉ったものである。

(14) *Mammotrectus* は、ヴルガータ訳聖書、『聖人伝』*Legenda sanctorum*



エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529)について

その他の著作に関して1300年頃、フランシスコ会士 Marchesinus によって編集された語句事典である。この *Mammotrectus* というタイトルは「胸に抱かれた赤ん坊」を意味するギリシャ語、*mammothreptos* のくずれた形であり、従ってこの本で武装すれば赤ん坊でさえも困難なラテン語に立ち向かえるというのである。

- (15) Livinus Hugenoys (1457–1537) の事を指している。ゲントのベネディクト会修道院長で蔵書家としても有名であり、エラスムスは福音書の写本をこの人から借りたこともあるという。Ep.1214. E. E. Tom IV. P.531–532.
- (16) 1286年頃、ドミニコ会士 Jean Balbi によって作られた大事典で、エラスムスはこれをしばしば批判の対象とした。例えば『反蛮族論』 *Antibarbarorum* において、注(14)の *Mammotrectus* と共に批判している。ASD. 1–1, P.58参照。
- (17) これもエラスムスによって批判の対象とされた辞典の一つで、Jean de Mera により編集されたものである。注(16)の *Catholicon* 同様『反蛮族論』で批判されている。ASD, *ibid.* P.61.
- (18) 『格言集』 *Adagiorum* によれば、キプロスの牛は人間の排泄物で育てられているが故に、並の牛より獰猛であり、粗野で馬鹿げた人間を指すものであるという。又エラスムスはその説明のためにアリストファネスの『福の神』 *Plutus* から *σκατοφάγους* (注(12)でとりあげた『ギリシャ喜劇全集』村川堅太郎訳では「糞喰い」と訳されている。同書354頁) をもとりあげている。LB. Tom. II. P.395 及び C. W. E. Vol.32, P.95 参照。
- (19) おそらく中部イタリアの Paeligni の人々を指すものであろう。
- (20) 『格言集』によれば、*Attica bellaria* の説明として、アッティカのうまい物変じて、考えられる以上に美味なるものを指す。L.B. *ibid.*, P.523, C. W. E. Vol.33, P.189–190.
- (21) *querni corticis* で、すぐ前の *natatitem betam* (*Natalis Beda*) 同様、注(8)の *de Quercu* を指している。

エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529)について

- (22) ASD版は、この話者を Bertulphus としているが、LB版及び参考にした1679年のアムステルダム版は、それぞれ Canthelus に訂正してある。1529年9月の版までは、Bertulphus となっており、1531年版からエラスムス自身によってこの誤りが訂正されている。ASD版は1529年3月の最初の版によっているので、あえて訂正をせずに注を加えているが、我々は話の筋をわかり易くするため訂正されたものを用いることにする。
- (23) ギリシャ語では κώμη、田舎の意。
- (24) sutoriam、注(21)と同様の手口でクチュリール、即ち Sutor を揶揄している。
- (25) 「人々の数だけ、意見の数あり」テレンティウスやキケロによって使われた諺。
- (26) Nam sua cuique sponsa videtur pulcherrima と表記されている。Saum cuique pulchrum. 「各人には自分のものが美しく見える」という諺の変形。LB. *ibid.*, p.76. C. W. E. Vol.31, P158-161.
- (27) bonis avibus。これは Bonis avibus malis avibus という諺。即ち「吉兆をもちて、凶兆をもちて」の意で、ギリシャの鳥占いからくるものであるという。LB. *ibid.*, P.57, C. W. E. *ibid.*, P.120. 参照。
- (28) このような論法は、『痴愚神礼讃』でも用いられるもので、エラスムスが語っているのか登場人物が語っているのか定かでないようなしかたで語る語り口を示している。これを Bertulphus に語らせてるところが面白い。
- (29) エトルリアの街で Quasi Sutrium erant という諺があり、自分の仕事に関しては自分で備えをすべきことを言う。その故事来歴については『格言集』に詳しい。LB. *ibid.*, P.1036 参照。
- (30) Rabinus。乱心とか狂気を意味する rabies を人名に変えたものか？
- (31) わざわざ、ギリシャ語 ἀρχιμωρός を用いて、誤った anticomorita と類似した新語、archimorita を作り出し、それを Bertulphus に語らせている所などは見事なものという他ない。この対話全篇を通じて用いられる地口廻し、言葉遊びについてはエラスムスの得意とするところであり、

エラスムスの *Synodus Grammaticorum* (1529)について

1526年に作られた対話のうち Echo がそれにあたる。拙論「エラスムスの Echo (1526) について」『福岡女学院短期大学紀要』第29号 1993 P. 1-7 参照の事。

※英文タイトルのナンバー(9)は、『福岡女学院短期大学紀要』第30号1994 までの『対話集』翻訳、研究シリーズの連続として、通し番号にしたものである。